【５】[[1]](#footnote-1)

この殘な人、私のからかならざるあるものを見て取つたのであらう。に切り取つたゞけの松のをにむやうにして一束にし、それを手に下げると、よちよちとその場からいてしまふのであつた。二度ばかり私の立つてゐる方を振いては何かつぶやいてゐたが、き取れはしなかつた。らく舌であつたらう。

子は、人に切られた松のの切をき込みながら

「お父さん。切られたところからのやうなものが出て來るよ」

と呶鳴つた。

「だよ。くて血を流してゐるんだよ。」

私は五十年生でもあらうとはれる々たる松の木を仰いで見た。松は々として何もらなかつたが、今年中にそのの半分はれてしまふだらうとつた。しかし、それも、明日からその人がびそのを切る作を行させないことを條件としてゞある。

「おい。お前はあの人は何あんなにしてゐるとふ？八十年もの中に生きて居つて何生きてゐる松のを切らなければ生活の出來ないしてゐるか知つてゐるか。」

私は歸、十二になる私の子に訊いた。

「あんない心を持つてゐるから？」

子は私のを見上げた。

「うむ。要するに自分の願が成したんだよ。」

「願が成した？」

「さうだ。あの人は八十年來になる行をして來て、それがいよいよ實をんだのだよ」

の行といへば、このお寺の近所の村の人たちはにの行にがない。いひへれば、一切、を作ることはひ切つて全したやうにはれる。

の裏の山道を歩いて見ると、手のきさうな、一人の力でれさうなで、られてゐないのは一つもないといつてからう。それは木につての仕だともいへよう。實この邊ののは生活につてゐるには相ない。女も子もい中から山へ行つてはを取つてにせたり、負つたりして來るのを毎日何十人と見る。等は木を取ることに中して、手當り第木をるのがになつてつたのだ。生木はつたところで直ぐさま家へ持つて歸れるには行かないが、つてけば、いつかはそれがになるのである。それがして自分の手に入るかどうかかでないが、萬一を僥倖して、まづ生木のをつてくのだ。時々大の男の力でなければ動かせないやうな松の木をこそぎひつこいててたのも見られる。これは中にそつと來て、手頃に切つてぶつもりなのだらうとはれたが、三日も四日もそのにしてあるのを見ると、それ[を]ひつこぬいた男が氣にでもかゝつたのか、それともりに大それ[た]に、そゞろをじたものか。くはその男が翻然して道をてゝの正道にめてゐてしいとらざるを得ない。

それらの人達が、水にもして、明け前から油桶を下げて水りをし歩いたり、或は人の家の井戸の水をんでゐるところを主人に見付けられて、呶鳴りつけられたりしてゐる圖にするたんびに、のとに、等が生ゑつけたの種のをしてゐるのだといふをどうすることも出來ない。（『京城日報』1940年5月22日）

1. 新聞では【４】と誤植されている。 [↑](#footnote-ref-1)